

枕上げの夜

小笠原 柚子

梅雨が明けたら、枕上げの季節だ。

夕暮れの田んぼの畦道を、ぼつぼつ人影が歩いていく。私も右手でおばあちゃんの手を引き、左手で二人分の枕を抱えて、えっちらおっちら会場になった小学校の校庭を目指す。

「楽しみだね」

おばあちゃんはにこにこ笑う。去年の夏におじいちゃんが逝ってしまったから、随分と気落ちして外出もめったにしなくなっていたけど、さすがに枕上げには行くと朝から張り切っていた。夏の初めの湿った風が、焼きトウモロコシのおいを運んでくる。

この辺りの特産品は瑠璃小豆だ。小豆のくせに青くて、あんこにすると見た目が悪い上に、小粒で固くてパサパサしてあんまり美味しくない。その代わり、お手玉や枕に入れると滑らかで最高の手触りになる。耳をつけるとサラサラいい音がするし、湿気を吸って温度調整してくれるので、夏は冷たく冬は暖かい。

そのうえ、瑠璃小豆の枕は夢をよく吸う。眠っている間にどんな夢でもぐんぐん吸ってくれるので、朝になったら頭はからっぽ、気分はすっきりだ。

この辺りの人間なら誰でも、い草で編んだ瑠璃小豆入りの枕を使っている。都会でも、知る人ぞ知る名品として結構な値段で売られているらしい。

ただし、夢をよく吸った枕は重くなるし、痛むのも早い。だから、この辺りでは年に一回枕上げをして、新品と交換するのだ。

校庭にはもう結構な人数が集まっていて、ナイターが炊き出しのテントを照らしている。喧騒から離れた隅っこで、神主さんと枕師のおじさんが、みんなから枕を集めている。ブルーシートの上に積み上げられた枕は、滑り台を超えそうな高さだ。私もおばあちゃんをベンチに座らせて、枕を抱えて二人のところに行く。

「今年もよろしくお願いします」

はいはいと朗らかに笑って、神主さんは枕を受け取ってくれる。その隣に立っている枕師のおじさんは、この辺りでは憧れの的だ。いかにも職人といった威風凛々しい顔つきで、無言のまま新品の枕を手渡してくれる。うやうやしくそれを受け取って、おばあちゃんのところに戻ってみると、炊き出しの豚汁をおいしそうにすすっていた。私もトウモロコシを貰ってきて、二人で腹ごしらえしているうちに、西の空はどんどん暗くなっていく。とうとう星がくっきり見えるようになる。神主さんが立ち上がって、メガフォンのスイッチを入れた。

「それではあ、そろそろお、始めますう」

待ってました！と威勢のいい掛け声と拍手が沸き起こって、にこにこしながら神主さんは枕師さんに向かって頷いた。パチンツとナイターが消えたけれど、校庭は充分星明りで明るい。枕師さんは背丈ほどある大きな筒のそばに立つと、枕の山から一つを手にとって、真剣な表情でじっと見つめた。枕とにらみ合うこと数秒、心を決めたようにはっと顔を上げて、筒の中にぎゅむぎゅむと押し込む。そうして向きをちょっぴり調整した後、先についた導火線に火をつけた。

ドンツ　ひゆるるるるるる　ばああん

「わあああ」

誰ともなく歓声が上がる。

見事に打ちあがった枕は、一番高いところで勢いよくはじけ飛んだ。夜空いっぱいには散らばった小豆が、きらめきながら図を描く。

「おおっ」

浮かび上がったのは、巨大なドラゴンだった。それも、まるまるとしてちょっ

と間の抜けた、絵本に出てきそうなドラゴンだ。ちらちらと瞬きながら、丸い目玉をぎよろりと動かして、これまた巨大な口を開けるとブウツと炎を吐く。吐きだされた炎はドラゴンすら飲み込んだかと思うと、あっという間に夜空一面を嘗めつくして、ガラガラともものすごい光を放つ。

と、今度はその光の煙幕を突き破って、SL機関車が現れた。こちらは今もくくと煙を吐きながら、銀河鉄道さながら夜空を走り回る。その速度はどんどん上がっていった、ついにはねずみ花火のようにぐるぐるハイスピードで回ると、ぱんつと弾けてしまった。あとに残ったのは、元通りの夏の星空と、小豆の燃える微かな香りだけだ。

やんややんや。

いっせいに拍手と歓声が沸き起こる。一発目にふさわしい、素晴らしい枕だった。

「いいぞいいぞ！」

「子供の夢かね」

「ずいぶん丸い竜だな」

「今年は最初から派手だねえ」

がやがやと盛り上がるギャラリをよそに、枕師さんは黙々と次の枕を大筒に詰め始める。

枕の吸った夢は、火をつけて打ち上げるとこうして夜空に再現される。悪夢がどの夢が出てくるかは、枕師さんの腕にかかっている。うっかり悪夢なんか打ち上げてしまったら、その年の枕上げは最悪の雰囲気になる。

とんどん打ちあがる枕は、夜空に次々と個性的な光の映像を浮かび上げさせていく。月を飲み込むクジラ、転がりまわる達磨、タケノコみたいに伸び縮みする摩天楼。中には、流行のアイドルが笑顔で手を振ってくれるものもある。たまに本人が出てきて誰の夢か分かってしまうこともあるけど、みんなで知らんぷりすることになっている。

吸い取られてしまって覚えていないけど、あの中に私のみた夢もあるのだ。どうせなら、みんなをあっと驚かせる最高の夢が私のものでありますように。

そんなことを思っているうちに、次の枕が打ちあがった。

小豆たちはきらきらと輝きながら、人の輪郭を描く。髪が長くて、口が大きくて、あれは。

私？

突然夜空いっぱいに浮かんだ自分の顔に仰天していると、ちかちかした巨大な私が微笑んだ。その目元には、大きな黒子がある。

あ、違う。あれは。

はっとして隣のおばあちゃんを見ると、くいいるように夜空を見上げていた。その目元には、同じ黒子がある。

あれは、おばあちゃんだ。若いころのおばあちゃんだ。これはおばあちゃんの夢なのだ。

慌てて空に視線を戻すと、顔のアップからだんだんと体全体に映像がひいていく。ワンピースを着たおばあちゃんは、にこにこ笑いながら、くるくる回って踊っている。まわりの点滅する光は、そのまま星なのだろう。

火花でできた銀河で、おばあちゃんは楽しそうに踊っている。

おばあちゃんは踊りながら、星の一つに触れた。とたんに、それはぎゅっと震えて芽が生え、幹が伸び、枝が広がって巨大な木になっていく。茂った葉がゆらゆら揺れて、ちかちか瞬く花がいくつも咲く。その花々が一際強く光ると、いっせいに鳥へと姿を変えた。木に止まった鳥たちは、羽ばたき、夜空の頂点まで舞い上がる。そうして、垂直直下に流れ星となって滑り落ちる。流星の雨の向こうに、木の幹にたたずむおばあちゃんが見えた。ゆっくり大きく手を振りながら、おばあちゃんは笑っている。柔らかいおばあちゃん笑顔は、そのまま吸い込まれるように夜空に消えた。

銀河がただの星空に戻っても、歓声はあがらず、うっとりとしたため息の音だけが校庭を包んでいた。

「あんな夢なら、覚えてたいくらいだったでしょ」

押し入れを開けて布団を降ろしながら、おばあちゃんに話しかける。開け放った窓からまだ夜空を見上げながら、おばあちゃんはうふふ、と恥ずかしそうに笑った。

あんな夢が見れるって決まってるなら、私だって枕は使わないかも。

そんなことを思いながら布団を引張ると、押し入れの奥に何か落ちてるのが見えた。

「あれ？」

ぼろりと、忘れられたように転がっていたのは、使い古された枕だった。

「え？なんで？」

確かに、おばあちゃんの枕は持って行ったはずだ。家を出るときに、おばあちゃんから預かったのだし。そこまで思って、はっとする。

去年の夏、入院していたおじいちゃんの枕も、すっかり青小豆入りのい草まくらだったっけ。大掃除の時にでも処分したと思ってたけど。

「看護婦さんの夢でも見とるかと思ったけど、案外、かわいいもんやったね」

ふふ、とおばあちゃんはまた笑った。

つまり、夜空いっぱいを使っただけのろけられたのかと思いつつ、私もなんだか照れてしまって、ふふ、とおばあちゃんと同じように笑った。